



谷口 研二

奈良工業高等専門学校 学校長

校長就任後の全校集会で私は「これからは仕事の国際化が進みます。皆さんは就職すると、アジアを中心とした海外で技術指導をしたり、現地生産工場の立ち上げなどで海外に派遣される機会が多いと思います。そのとき、現地の人達と英語によるコミュニケーションは不可欠です。英語が嫌いだから高専に進学したという学生さんもいるかも知れませんが、英語ができなければ、将来、活躍の場は大きく制限されるだけでなく最先端の技術情報も入手できません。だから、卒業までに英語が使える国際人になって欲しいと思います。高専生にとって英語はもはや避けて通れないのです」と皆さんに伝えました。これを聴いて、「国際感覚を磨く」＝「英会話能力の向上」と誤解した学生もいたようなので、この紙面で追加説明をしたいと思います。

価値観の違いを尊重する

「国際感覚を磨く」は「英会話能力の向上」と等価ではありません。重要なキーワードである「国際感覚」の意味を考えるため、私が海外駐在時に国際感覚の必要性を意識させられたエピソードを紹介します。

自己紹介のとき、私達は「…会社に勤めています。」とか「奈良高専の学生です。」と所属する組織の名前を出しますが、欧米では「…の開発をしている技術者です。」と言うのが普通です。所属している組織を重要視する日本人と、組織の中にも自己主張を忘れない欧米人との違いが明確にみえる典型的な例です。

仕事の仕方についても欧米と日本では大きく異なります。仕事の進捗が予定より遅れると、皆で助け合いながら遅れを取り戻そうとする日本人技術者に対し、欧米の技術者はあらかじめ個々

人の仕事を明確に区別して契約し、他人の仕事が遅れても一切関知しません。“契約”社会で生きている彼らにとって、未契約の仕事をするそこそが非常識なのです。

宗教上の倫理観に基づく誤解もあります。仕事を終えて母国に帰る技術者が私の机の上のノートパソコンを見て「このパソコン、私もらってあげます。」と言いました。「日本語の使い方が間違っているよ。『このパソコン、私にいただけないでしょうか』が正しい表現です。」と説明したところ、その外国人技術者は「『もらってあげる』でいいんです。」と言い返してきました。イスラム社会では、お金持ちが貧しい人々に喜捨する行為を善行とみなします。“裕福な”日本人は“貧しい国”の技術者にノートパソコンを持ち帰っていただくのが筋だと、彼は善意で喜捨するよう私に勧めていたのです。

外国の人々と一緒に仕事をしていると、このような価値観の違いを強く認識させられることがよくあります。そのような場面では“日本”の常識を相手に強要しないことです。「国際感覚を磨くこと」の一つは、民族や宗教による価値観の違いを認め合うことです。「日本の常識は世界の非常識」と言われることもあるように、ひょっとすると、日本はガラパゴスのような文化・慣習の特異点かも知れません。普段からそんな認識をもって異国の価値観を尊重し、それぞれの立場や考え方の違いを認めて仕事をするのが大切です。

自己主張の勧め

もう一つは、技術者が現地で自己主張できる能力を身につけることです。私達は、普段、組織の一員として認められるような個性を抑えて集団の中に溶け込もうと努力をします。しかし、海外では咄嗟の機転・判断で自己主張ができる人が尊重されます。その時、社内事情を考慮しながら企業の代表者のように振る舞い、現地の常識ともうまく折り合えるバランス感覚を示さなければなりません。失敗もあるかも知れませんが、その時には傷口を広げない努力をすれば良いのです。

このように自分の意見を明確に持ち、それを主張できる人になって欲しいのです。その能力を育む近道は、学生時代に本当にやりたいことを見つけ、それに徹底的にのめり込む経験することです。指導者がいなければ、自分で解決策を考えることが多くなります。壁にぶつかって何度も悩み、何度も失敗することでしょう。しかし、成功した時の喜びは、失敗の数に比例して大きくなります。このような、一見、無駄とも思える時間を経験することが、将来、実体験に裏打ちされた主張として海外勤務でも役に立ちます。

これに関連して、本年度から、学生が自主的に考えた取り組みを支援する「学生チャレンジプロジェクト」を立ち上げました。学生のアイデアに対して資金的援助をして、学生の心に“積極性”の火を点けることがプロジェクト立ち上げの目的です。自ら没頭できる対象を見つけた学生が、このプロジェクトを通して自らの能力を高める契機となることを期待しています。